楽園のカフェラッテ！

冬森圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
楽園のカフェラッテ!

【Nコード】
N8857Y

【作者名】
冬森圭

【あらすじ】
道端で少女を拾った。ろくに衣服も身に着けていない、幼い少女だ。身一つの貧相な身なりと、果たしてどこかに監禁でもされていたのだろうか、首輪が掛けられている。少女のつぶらな瞳とふわふわな髪の愛らしさ。そして、ちらちらと覗く尻尾……?　だらんと垂れ下がった耳……?　少女は全く『犬』だったではないか!　ある日を境にして『犬』が女の子に見えるようになってしまった青年は、その犬――ではなく少女――を連れて帰ることに決めた。そうして彼の暮らす喫茶店は、人と犬とが交差する不思議な場所へと変

わっていったのだ。

01　監禁少女を誘拐することにした

捨てられている。
傍を通りかかった青年は、はじめ一瞥もくれてやるつもりはなかった。
そのつもりだった。

雨は鈍色（にびいろ）の空からしとどに降り注ぎ、青年の帰り道の、アスファルトを叩く。唯一、高架橋のコンクリート天井だけが、水滴から隔絶された空間を提供する。
高架橋の下は、周りに壁も何もないのに、内と外とを隔てているような気にさせた。雨音の一定のリズムは他の音を排他し、逆にこの場所を静かにさせる。雨の打ちつける町は、出歩く人もなく、無人のようだった。それと二人きりのような錯覚を青年にさせた。
この場所へ、同じくして雨をやり過ごしにきたということが、ふと彼の同情心を誘った。
天井の隙間から漏れ出て、所々にできた、水たまりに足を突っ込ませないよう気をつけながら、青年は近づいた。

「大丈夫か？」
それ――少女は、柱の陰にうずくまっていた。
返事こそしなかったものの、そっと顔を上げて反応してみせた。
どうやらいちおうの元気はあるようだ。
「おまえ、どこから逃げ出してきたんだ？」
顔を上げたときに、革製の首輪が覗いた。
きつく巻かれたその枷は見るに堪えない。鎖で繋がれていたのだろうか。そして何かの拍子にその鎖が外れて、今こうしてここまで脱出してきた、というところだろうか。

人はそれを『監禁』とも言うが。

「…………」

少女のつぶらな瞳がくりくりと見つめてくる。瞬きするのも惜しいと言わんばかりに、じっと目線を離さない。雨に濡れた彼女の髪の毛が、頬に耳に張り付いている。

このままでは風邪でも引くかもしれない。そう思った青年はしかたなく、少女を連れて帰ることにした。

「とりあえず家へ来な。服くらいは乾かしてやるから」

青年は彼女にそっと手を回して立たせ、それから自らの上着を脱いで着せてやった。

ちなみに、これは『誘拐』にはあたらない。なぜなら……。

「ぁ、ありがとう……ございます……」

少女の後ろからちらちらと見え隠れしているものがある。

ぱたぱたと、彼女の尾っぽが振れていた。

そう……彼女は、まったく人間などではなかった！

「高架の下を歩いていこう、いけるとこまで。……おいで」

「……はいっ」

少女は顔をふるふると左右に振る動作をして、水を払い落とそうとした。

人のそれとは違う、だらんと垂れ下がった耳が軽快に踊り、青年に飛沫した。

「あぅ……ごめんなさい……」

ひとまず、家に着くまでの辛抱だ。

02　犬とお店と姉ちゃんと

「あ、また店の入り口から入ったわね！」
扉の頭に取り付けた鈴がカラカラと鳴り、その音を聞きつけて、店の奥から店主の声があがった。
「ごめん。ちょっと、荷物があってさ」
少し小降りになったとはいえ、外は雨模様だ。自家用の出入り口はこの店の裏側にあるので、遠回りするぶん余計に濡れなければならない。
把握したこの店の店主は、代わりにカウンターの奥から出てきて、『荷物』を出迎えることにした。

「おかえり、トシちゃん。……ありゃ」
「……ただいま」
トシと呼ばれた青年、嗣郎（しろう）は気まずそうに、上着にくるんだ少女を抱いて立っていた。
その両腕にちょうど収まる程度に小さくて、大きな荷物。
それは、学校からの帰りに、制服を濡らして帰ってきたことよりも、ずっと彼の決まりを悪くさせた。

その荷物――当の少女はというと、嗣郎の体に抱きついたまま、縮こまっていて伏し目がちである。店に来るまでは、辺りをきょろきょろと見回したり、嗣郎の顔を見上げたりしていたのだが、どうにも嗣郎以外の人間を前にして落ち着かないらしい。
彼女のぺたんと垂れた耳は、顔を隠さんという勢いだ。
人見知りなのかな……コイツは。嗣郎はひとり察した。

「いったいどうしたの、そのワンちゃんは？」
店主が嗣郎の顔と、『少女』とを見比べて言った。

「高架の下で見つけたんだ。首輪をしてるから、たぶん捨て犬じゃない」
「なるほど、ね……。とりあえず何か、拭くもの持って来るわ」
「うん。頼んだ、甘姉（あまねえ）ちゃん」
この店の店主、姉の甘音（あまね）は、一旦店の奥へと消えた。
甘音は、嗣郎の抱えているモノが『少女』には見えない。嗣郎の学校の友達も、甘音と仲の良いお隣さんも、この喫茶店に毎日コーヒーを啜りにやってくる常連客も、誰も彼もそのモノが『少女』だとは思わない。
これは嗣郎だけに起こっている奇妙な現象なのだ。

「やっぱり女の子に見えるの？」
乾いたタオルを手に姉が戻ってきた。
「女の子なの」嗣郎はことばの端にシュールさを滲ませた。「犬のタレ耳、女の子、尻尾つき」
ランチセットみたい、と姉がこぼした。
タオルを嗣郎に手渡し、なかなか目をあわせようとしない少女を覗き込む。
「で、この子はどんな感じの子？　私はあの犬の、子どもに見えるけど。何ていう犬種だっけ、えーと……ナントカ・ナントーカー？」
「ほとんど情報ゼロなんだけど」

嗣郎が少女に視線を落とすと、思わず目が合った。少女のほうはまるで何かを期待するかのように、じっと嗣郎を見つめていた。
自然と少女の尻尾が、ふるふる振れだした。
彼女の尻尾と髪の毛は、淡いクリーム色で、柔らかそうだ。雨に濡れた毛先はくりくりと毛羽立っている。もっと伸びたら、波打つようなきれいな髪になるだろう。

嗣郎は少女の濡れた身体を拭いてやろうとして、途中で手を止め

た。
「甘姉、やっぱ代わりにお願い、このまま抱えてるから」
タオルを姉に押し付けて、嗣郎はそれきり顔を背けた。
彼にとって『犬』のヴィジョンは、そう、健全でない。
なぜならば、イヌは、ヒトと違って身に着けているモノがないから。
とはいえ、素っ裸というわけでもなく。
「肌着姿に見える……」
「へぇ～」
この助平ぇ～、と姉はおちょくりながら、少女の――子犬の身体を丁寧に拭いてやった。

03　私的少女定義

いつの頃からだろうか、ある日を境にして、青年の認識は歪んだ。身体は毛で覆われ、細長い四肢で歩き、口から鼻にかけて突き出ていて、優れた嗅覚をもつ哺乳類――イヌ、をそっくりそのままヒトとして、青年は認識してしまうのだ。

それだけに留まらず、彼はイヌと会話することすらできた。イヌは人語をある程度理解する。そして、イヌにも感情はあるといわれている。それら感情に起因するしぐさや動作を、彼は機微に読み取って、ことばとして受け取ることができるのだ。

彼にしてみれば、相手は等身大の――サイズによりけりだが、とにかく――同じヒトとして映るのだから、意思疎通は何ら難しいことではなかった。

なぜこのような認識をもつようになったのか、彼自身、とんとわからなかった。しかし、とりわけ体に異常があるわけでも、日常生活に困るでもないので、彼はなるべく気にしないできた。

問題があるとすれば、それは。……少女にばかり見えてしまうことだった。それも、可愛げのある、女の子として。たいていのメスなら幼い、若々しい少女に見え、またオスですらそのように見えることもあった。

彼は本来、イヌそのものにあまり好感を持ってはいなかった。なるべく関わり合いになりたくないという程度に嫌っていた。

高架橋の下の子犬も、ヒトの成り形をしていなければ、見て見ぬ振りをしていたかもしれない。

問題がもうひとつあるとすれば、つまりはそういうことだった。

イヌが嫌いなのに、どうしようもなく気になって、肩入れしてしまうのだ。

◇

「俺は嗣郎っていうんだ。ホントの名前はトシロウなんだけどね。こっちは内緒だ」
嗣郎は少女の髪をブラシでとかしてやりながら、自己紹介をした。
「しろう……？　トーシロー？」
「それで合ってるが、その微妙に嫌なアクセントはヤメロ」
このおバカ犬め、と軽く少女の頭を小づいたら、
「ご……ごご、ごめんなさい！」
と、勢いよく謝られてしまったので、仕方なくそのまま頭を撫でてやった。
尻尾がぱたぱた振れていた。

「バカ犬呼ばわりされたくなかったら、名前くらい教えてくれよ」
「なまえ、ですか……？　わたしの？」
「そう。飼い主に何て呼ばれていたか。それから、どうしてあんなところにいたか、も」
少女の反応は薄い。幼いとはいえ、ことばはそれなりに話せるはずだ。
はっきりとした意識も持っているようなのに、どうにも歯切れが悪かった。
「じゃ、バカ犬と呼ぶよりほかない」
「え、えぇ〜〜……。なんだかそれはうれしくないです……」

04　ミルキー・ティーブレイク！

嗣郎と少女は、店の奥のほうの席に居座っていた。

昼下がりも過ぎ、日も暮れかけ、おまけに雨天。その二人を除いて他に客のいなかったことは、ちょうど都合がよかったといえば、よかった。

せめて雨の降っていない、午前だったならば、それなりに常連客の集まる喫茶店だ。暇つぶしにやってくる人、世間話をしにくる人、そうしてしばしば発生する井戸端会議に加わりにくる人。あるいは、店を少し行ったところにある、一時間に二本しか来ない駅の電車待ちや、人との待ち合わせのためにやってくる人。

店主である甘音の気取らない親しみやすさと、目立ちすぎず地味すぎない佇まいで、この店は町の便利な寄合所として知られていた。

◇

嗣郎はあらかた少女の髪をといてやった。

……一般の少女はドライヤーをあてられることを極度に嫌がる、ということを知っていたので、少女の髪を乾かすのに時間がかかってしまった。

嗣郎は仕上げとばかりに、ぽんぽんと頭に手を乗せた。

「わう……」

振り向いた少女は心地よさそうにしていた。

「いちおう薄めてみたの。大丈夫かな？」

甘音がお椀を持ってきた。ほんのり湯気の立つ白くまろやかな液体。

それを少女の前に、甘音は妙に仰々しく差し出した。

「こちら、当店自慢のホット☆ミルクでございますわ。よろしけれ

ばセットで、トーストと、それからボイル☆エッグもお付けして……」
「甘姉、そういうの、イランから」
一給仕人としての血が騒いだのか、子犬相手にモーニングセットのサービスをしようとする姉を、嗣郎は制止した。
しかも、モーニングの時間はとっくに過ぎてしまっている。
「えっと、それはなんでしょうか……？」
さらに、少女は理解していないご様子だった。

「まぁ、毒ではないから飲んでみなよ」
嗣郎が促すと、少女は器に口をつけた。
「あったかぁい……。これは、うん、なんだかおいしいものですね！」
「『ホットミルク』な」
少女のお気に召したことを甘音に伝えると、それは私が作りました、とでも言いたげに、小躍りしていた。
「この、あまねぇーさん？　は、ホットミルクのお店やさんの人なのですか？」
「うん、違うけど」
そうだよ、と嗣郎は面倒だったので、いい加減に言っておいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8857y/

楽園のカフェラッテ！

2011年11月27日19時45分発行